# Guitar dream　NO.16(2009. 4)の紹介　by yakateru

表紙

メイン目次

**【巻頭ロング・インタヴュー　抜粋・概要】　ガリーナ・ヴェイル**

ド派手な衣装で表紙を飾るウクライナ出身のヴェイル。パガニーニの技巧的な曲の時は、目隠しをして弾くことも・・

- 私は、演技というか自分を演出するのがとても好きです。コンサートにも演劇の要素を加えたいと思っているし。子供のころの夢が、「音楽のできる女優になること」でした。特に、子供たちに音楽を聴かせてあげるときは衣装はとても大事です。それしか記憶に残らないから。
- フラメンコが好きです。ヴィンセント・アミーゴ、パコ・デ・ルシア。使っている楽器もラミレスで、曲によってはフラメンコ的な強いアタックで弾いています。
- パガニーニの演奏と演出は、未来を予言した音楽家だったと思います。
- 山下和仁さんの「展覧会の絵」を頑張って取り組みました。山下さんの演奏は、ウウン、一口では言えないですね。今でも答えるのは難しい。もちろん素晴らしいのですが・・・・・
- ジョン・ウイリアムスのテクニック、メカニックは素晴らしいですね。でも音楽的には、彼の演奏を真似をすればいいというわけではないですね。
- 音楽とは、「魂を表現すること」でしょうか。若い頃は悲しい雰囲気の曲ばかり弾いていました。今は、演奏に喜びがあるいわれます。それは、私の人生において、真っ暗闇から明るい場所に移動したような状況だからでしょう。

**【(新)話題のアーティスト紹介　Chen Xi】**

中国の若手ギタリスト Chen。彼女を指導している He Qing 氏との二人へのインタビュー記事です。ほとんどは、He 氏の話です。

- (He) 指導するうえで基本にしていることが二つあります。1つはテクニック。ただ、単なるメカニックでなくギターに対する感性を養いギターを理解することを求めています。もう一つは、音楽面。音楽の知識や鑑賞力、つまり音楽を見る目、感性ですね。
- たとえシンプルなメロディーであっても、そこからオーケストレーションを感じ取れなくてはいけません。また、歌を学ぶことを勧めています。フレーズを感じ、呼吸をコントロールすることはギターを弾くうえでもとても重要です。

- 音楽では、すべての音をはっきり出す必要はありません。これを理解するには、フルートの演奏を聴くことが役立ちます。
- ディアンスの「リブラ・ソナチネ」は、みんな 3 楽章「フォッコ」しか弾かない。せめて 2 楽章から弾いてほしい。また、ホセの「ソナタ」等はとても重い哲学的な曲です。

**【クラブ・マリアデュオのインタビュー：菊池通介】**

この当時、ギタリスト教会の委員長に就任したということでのインタビュー記事です。

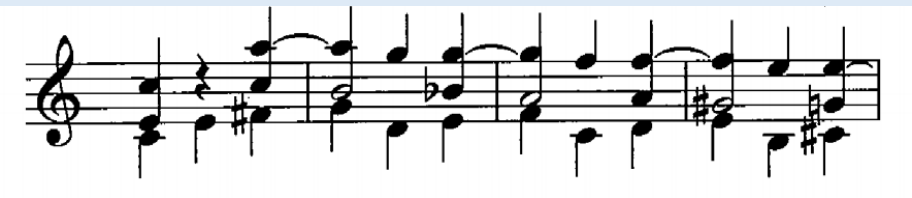
- （ギター上達の秘訣というのは？）音をよく聴くということです。自分が出した音を聴くことができなければ、演奏がどうなっているかわからない。音量のバランス、リズム、和音、重なっている旋律、音色、それらを全部聴き取りながら演奏しなければいけません。
- ギター以外の曲をスコアーを見ながら聴くといいですね。
- 音楽において、一定のリズムの周期を感じることが重要です。それぞれの曲の独自のリズムだけでなく大きな周期を感じ、それを意識した演奏を取得することを勧めます。
- メトロノームの正しい使い方。メトロノームの速度を 60 以下に設定し、それにあわせて開放弦を弾く。ここで、よく聴かないと僅かな音のずれに気づかない。それができたら、音階にチャレンジし、そして 1 拍の中に同じ音を 2 つ 3 つと入れていきます。そして、さらにリズムやアクセントをつけて練習するのです。これを 3, 4 年間やればいいリズム感が身につきます。(yakateru:んん、今からでは手遅れということか！)

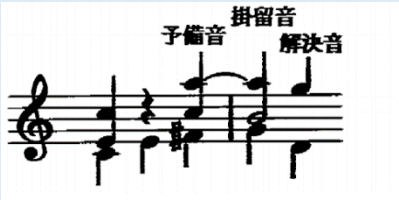
**【新　マエストロ養成講座　第3回】**

新しく模様替えということで、この講座は、メルツの「小品集　かっこう」から曲を取り上げて、その演奏法が紹介されている。今回は、「埴生の宿」「モーツアルトのセレナーデ」です。

**【その他の注目すべき記事】**

- 「21 世紀のギター教本：佐藤弘和」： 12 の練習曲プロジェクト。今回も和音の練習で、佐藤氏オリジナルの結構ちゃんとした練習曲が掲載されている。結構高度な技術が要求されています。
- 「クール・アレンジメント：竹内永和」：ネスカフェの CM ソングにもなった「やさしく歌って」、ナポリ歌曲の「帰れソレントへ」のソロアレンジが掲載されている。
- 「非和声音のしくみ」の第 4 回は、「掛留音」。掛留音は、倚音と似た非和声音。倚音が、拍点で用いられるように掛留音も拍点で用いられるが、こちらは 2 つの和音進行にまたがって使用される場合とのことです。下の 2 小節目の 1 拍目の音のことです。タイがついていない時は、倚音となるそうです。






- 「ギターのツボ：毛塚功一」：第 16 回は、アルペジョについて解説しています。
- ちなみに、難しくてお手上げだった「ギター達人への道」は今回が最終回。なんと、武満徹の「フォリス」が題材となっています。いやあ、これは私の手には負えないわけです。

その他、「海外レポート」等もあります。第 16 号のメインは、そんなところでしょうか。

また、Guitar dream には、楽譜と模範演奏 CD がついている。今回は、下記の楽曲が掲載されている。

# ギターグルメのためのレパートリー Guitarists

**フランシスコ・タレガ**

## グラン・ホタ

ギターという楽器の特性を紹介するにはうってつけの曲です。わかりやすい主旋律に多彩な技巧を駆使した変奏を備えたこの種の曲は他の楽器にも見られ、サロン風なコンサートで腕前を披露するなど気楽に楽しめるものです（実際に演奏するとたいへんですが…）。《グラン・ホタ》の変奏の総数は 40 を数えますが、その時その場の雰囲気に合わせてチョイスし、即興的に演奏されたようです。ここではもっともオーソドックスな変奏を選んでみました。（毛塚功一）

**二橋潤一**

## 「スカボローフェア」変奏曲

サイモンとガーファンクルでおなじみの曲ですが、原曲はイギリスのバラードです。素朴な旋律に旋法的な和声をつけて主題とし、少し近代的な響きも用いて変奏曲にしました。今回は第 3 変奏までです。（二橋潤一）

**佐藤弘和**

## トゥモローソング

近作ではありません。2000 年もまさに終わらんとする年の瀬に作曲（もう 10 年近く経ってしまったのですね…）。明日に向かって前向きに…という気持ちを素直な曲調で表現しました。ハ長調というまっさらな調で、奇を衒った音も使わず、自然に任せる…そんな作り方が上手くいった例でしょうか。ほとんどの部分で下行するベースラインは落ち込むのではなく、上昇志向のあるメロディと相まって幅を広げるイメージ。唯一メロディーのシメの部分である18～20だけベースも上行します。《ベイビーズ・ソング》の形式とも通ずるものがありますが、メロディは21で終わり。その後は間奏21～23、繰り返し記号以降はコーダ24～29となります。明朗快活に弾いてください！（佐藤弘和）

**アントニオ・ルビラ**

## 愛のロマンス

いわずと知れた名曲。近年は 19 世紀後半に活躍したスペインのギタリスト、ルビラの作曲と明記されるようになりました。原曲は単に《エチュード（練習曲）》となっていて、面白いのはアルペジオのパターンがシ・シ・ソではなくシ・ソ・シの順番になっていること。今となってはどう聴いてもこのエチュードは《禁じられた遊び》に聞こえてしまいます…。

この曲はもともとオリジナルなのですからアレンジとして完成度が高いのは当たり前ですが、それをあえて別ヴァージョンでというのが、今回の僕のアレンジです。原曲のイメージがあるため、キー、メロディ、3連符のアルペジオパターンを変えないというコンセプトで、最小限にイントロ、間奏、コーダを付け、和声を工夫しました。中間の長調になるところで3連符から離れたのは、リズムに躍動感やスピード感を持たせたかったためです。何よりこれは「エチュード」ではありませんからね！

正調「禁じられた遊び」に飽きた方、ちょっと聴き手を「?」と思わせたい方、どうぞこちらのヴァージョンをお楽しみください。（佐藤弘和）

**フェルディナンド・カルッリ**

## 24 のデュエットより（ギター教則本 op.27 より）

第 19 番は緊張感とダイナミズムあふれる楽想が味わえる 1 曲です。練習曲として見ると 3 度を中心に徹底した和音連打の練習で安定して弾けることに加え、クレッシェンドやディミヌエンドなどコントロールができることが求められています。テンポ的には 4 分音符で 150 ～ 160 くらいが出せると切迫した感じが表現できると思います。曲の大方が 8 分音符なので現実的にはそれほど忙しい速度でもありませんが、2小節目などに現れる 16 分音符を伴った付点のリズムは曲者で、サラリと弾くにはフォームや脱力の練習や研究が必要です。（長谷川郁夫）

**ヨーゼフ・カスパル・メルツ**

## 舟歌

「舟歌（バルカローレ）」と言えばホフマンやコストの「舟歌」など明るく穏やかなものもありますが、やはり舟というのは“ヴェネチア”のゴンドラですから、憂鬱さを伴います（イメージ的に）。そういう意味ではこのメルツの作品はメンデルスゾーンの《ヴェネチアの舟歌》（《無言歌》の中に 3 曲あります）の流れを汲むものです。ギターの作品ではタンスマン《カヴァティーナ組曲》の《舟歌》なども同様の雰囲気でしょう。

曲はテルツギターのソロから始まって、すぐに水面が波打つかのような 2nd. ギターの和音のトレモロが入ります（5）。かなり陰鬱なパッションを感じるイントロが終わった後、揺れるようなリズムを持った主部に。単純な 3 部形式 (A 23～40、B 41～56、A' 57～71、コーダ72～80 ) で、劇的な変化も少なく淡々と音楽が進んでいきます。最後のマイナーコードがいきなりメジャーコードに変わり終止するのは、どんよりとした曇り空に一筋光が差し込んだかのようなイメージを喚起させます。（佐藤弘和）

**クロード・ドビュッシー（壺井一歩・編曲）**

## 牧神の午後への前奏曲

近代音楽への扉はこの作品によって開かれたと言っても過言ではないでしょう。ドビュッシー初期の傑作にして、音楽史上の数限られたマイルストーンのひとつです。

機能和声が希薄化していく中で、それでも残っているドミナント進行（拡大解釈されたものも含め）をいかに感じ取っていくかがむしろ重要ではないでしょうか。例えば56～57の進行は旋律の全音音階を含む劇的な解決です。この時代の音楽ではドミナント進行はかえって際立つのだろうと思います。

ギター 4 重奏編曲にあたって、途中のブリッジ的な部分を追加しました。（壺井一歩）

**織田哲郎（平倉信行・編曲）**

## おどるポンポコリン

かなりの長寿アニメになっています。明るく楽しい主題歌もヒットし、老若男女に知れわたる曲です。

リズムの基本はロックです。リズム、ベースパートは2, 4拍にアクセントをつけ、それ以外の拍はスタッカート気味で弾きます。決して重くならないようにしましょう。Cの17、19のリズムはオリジナルでは印象的な手拍子のところです。合奏する人数に余裕があれば手拍子も入れて盛り上げましょう。72～74の間奏はお遊びの部分です。4th は三味線の感覚で軽く弾んで弾きましょう。

今回の曲は歌うなり踊るなり（？）、いろいろ楽しんで下さい。ただ、ロックのリズムのノリだけは出せるようにしましょう。（平倉信行）